

令和 5 年 9 月 29 日

## プレコンセプションケア（妊娠前からの健康管理） は、どの程度女性たちの間に浸透しているか ～静岡県中山間地域での調査報告～

### <研究成果のポイント>

- 妊娠可能年齢の女性の中にプレコンセプションケアがどの程度浸透しているのか、静岡県中山間地域の女性住民を対象としてインタビューとアンケート調査を行いました。
- プレコンセプションケアについて「詳しくは知らない」または「全く知らない」と答えた人の割合は、出産の経験者でも 66%、未経験者では 98%に及び、ほとんど知られていない状況でした。
- 情報周知や医療機関へのアクセスについての課題も浮き彫りとなりました。

※本研究成果は、Springer Nature グループの学術誌「BMC Pregnancy and Childbirth」オンライン版に日本時間 9 月 16 日に公表されました。

### <概要>

本学地域家庭医療学講座の井上真智子特任教授、静岡家庭医養成プログラムの柴田靖美医師らの研究グループは、妊娠可能年齢の女性の中にプレコンセプションケアがどの程度浸透しているのか、静岡県中山間地域の A 町の女性住民を対象としてインタビューとアンケート調査を行いました。妊娠前からの健康管理についての知識・実施状況について、妊娠経験の有無による違いを明らかにしました。情報周知や医療機関へのアクセスについての課題も浮き彫りとなりました。

本研究は Springer Nature グループの学術誌「BMC Pregnancy and Childbirth」オンライン版に 2023 年 9 月 16 日付で掲載されました。

### <研究の背景>

プレコンセプションケアとは、「将来の妊娠を考えながら女性やカップルが自分たちの生活や健康に向き合うこと」で、具体的な項目には葉酸サプリメントの摂取、禁酒、禁煙、適正体重管理、栄養管理、性感染症や子宮頸がんの検査、ヒトパピローマウイルス感染症(HPV)・風疹ワクチン、歯科検診などがあります。日本では、さまざまな少子化対策が議論されていますが、健康な妊娠・出産に向けて妊娠前からの女性の健康管理をサポートする取り組みは乏しく、プレコンセプションケアの展開は他の先進諸国から大きく遅れを取っています。

本学地域家庭医療学講座の井上真智子特任教授、静岡家庭医養成プログラムの柴田靖美医師らの研究グループは、妊娠可能年齢の女性の中に、プレコンセプションケアがどの程度浸透しているのか、静岡県中山間地域にある A 町に住む 20～43 歳の女性を対象としたインタビューとアンケート調査を行い、現状の課題や対策を検討しました。

### <研究の成果>

本研究は、探索的順次デザインという混合研究法を用いました。

はじめにインタビュー調査で 13 名から個別に体験を聞き取りました。次に、その分析結果をもとに、質問紙(アンケート)の開発を行いました。さらに、そのアンケート調査を 20～43 歳の女性住民から無作為に抽出した 831 名に送付し、232 名から回答を得ました(回答率 26%)。調査には、妊娠出産経験のある人となない人が両方含まれています。

まず、プレコンセプションケア(アンケートでは「妊娠前ケア」と表記)について「詳しくは知らない」

または「全く知らない」と答えた人の割合は、経験者でも 66%、未経験者では 98%に及び、ほとんど知られていない状況でした(図1参照)。たとえば、代表的な推奨項目である「葉酸サプリメントの摂取」については、未経験者は「葉酸」という言葉自体を知らない人が多く、経験者の間では妊娠中に摂取していた人は6割いたものの、本来摂取を開始すべき期間である、妊娠の数ヶ月前からの摂取はほとんど行われていませんでした(図2参照)。

妊娠の経験者には、前回の妊娠の際に実行していた項目について聞きました(図2参照)。禁酒や禁煙、栄養や体重の管理など日常生活の中で取り組める項目は7割以上の方が「実行していた」と答えました。それと比較し、病院で検査が必要な項目を実行していた人の割合は低い傾向があり、性感染症検査を受けていたのは5割以下でした。行政から2年に1度案内が届く子宮頸がん検診を受診していた人は68%で、公費による検診の効果は一定見られていましたが、欧米では75~80%以上の国が多いことを踏まえると実施率は低めといえます。

プレコンセプションケアで推奨される行動をとるきっかけとなった情報源(図3、複数回答可)は、多かった順にインターネット(70%)、家族や友人(59%)、本・雑誌(57%)、産婦人科医(54%)という結果でした。第一段階のインタビューの結果からは、女性たちはインターネットでよく検索はするが「情報の正否がわかりにくい場合がある」と考えていること、家族や友人など親しい女性からの助言は推奨行動をとるきっかけになりやすいこと、マタニティ雑誌はよく活用されていること、などが把握できました。

現状の課題として、産婦人科を女性たちが受診するタイミングは「妊娠したかもしれない」と思った後のことが多く、プレコンセプションケアの助言を受ける時期としては遅いということがあります。本来は、「かかりつけ医」が家族計画の段階から助言できることが望ましいですが、日本では若い成人の半数以上はかかりつけ医を持っていないため、医療分野からのアプローチが取りにくいという面があります。プレコンセプションケアとして取り組んでほしいセルフケアや医療相談について、個々人のライフステージに適した助言を届ける仕組みを検討していく必要があります。

### <今後の展開>

本研究を実施した町では、クリニックから行政に働きかけを行い、プレコンセプションケア推進や女性たちのサポートに取り組んで行きたいと考えています。また本調査には、上記の結果以外にも女性たちがプレコンセプションケアの相談環境に求める要素や、家族計画を考える際に重視すること、妊娠に対する意識などの調査も含まれています。国内の他の地域でも類似した状況があると考えられるため、各地域の参考になるよう順次情報発信を行う予定です。

### <発表雑誌>

BMC Pregnancy and Childbirth (<https://doi.org/10.1186/s12884-023-05940-8>)

### <論文タイトル>

Knowledge and practices of preconception care among rural Japanese women: Findings from a mixed methods investigation

(日本のへき地の女性たちの妊娠前ケアについての知識と実践：混合研究法による結果)

### <著者>

柴田靖美、阿部路子、鳴本敬一郎、金子惇、棚橋信子、Michael D. Fetters、井上真智子

### <研究グループ>

浜松医科大学 地域家庭医療学講座

### <本件に関するお問い合わせ先>

浜松医科大学 地域家庭医療学講座 特任教授 井上真智子

メール:machiko@hama-med.ac.jp 電話:053-435-2416

<参考図>

図 1

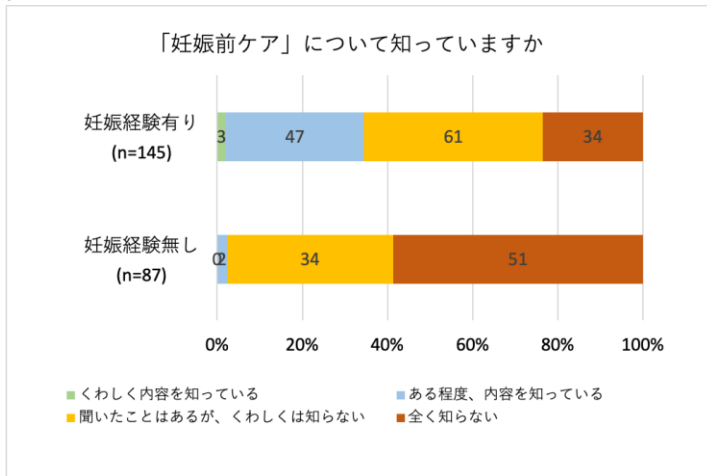


図 2

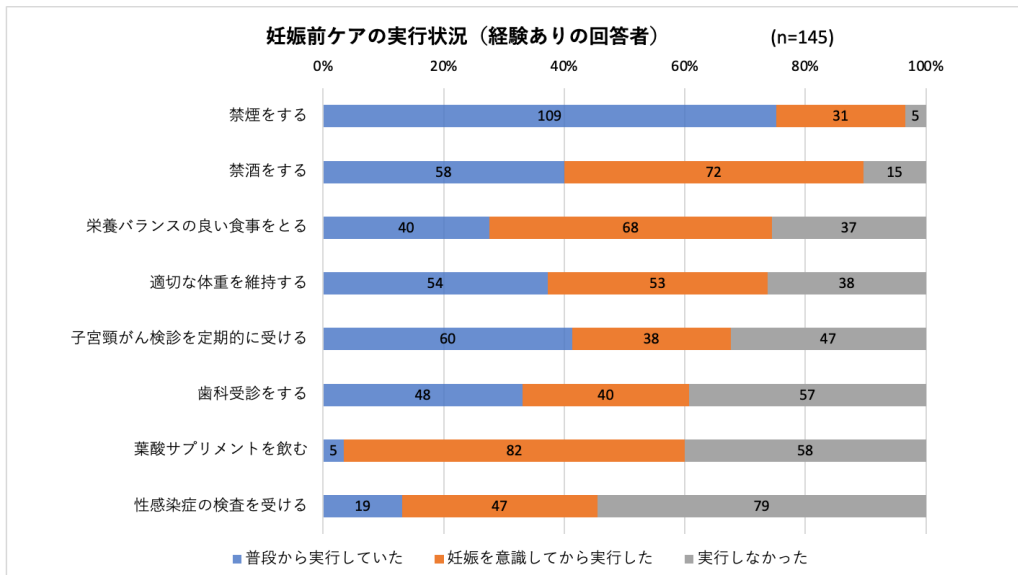


図 3

